

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00034

研究課題名（和文）いわく言いがたいものの現象学：「フランス現象学」の生成と発展に関する研究

研究課題名（英文）Phenomenology of the Ineffable: Studies on Origin and Development of French Phenomenology

研究代表者

佐野 泰之（Sano, Yasuyuki）

立命館大学・衣笠総合研究機構・特別研究員

研究者番号：70808857

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の期間中、フランス現象学に関する基礎的文献についての読書会を隔週で継続的に開催し、研究分担者間で問題意識と学術的知見の共有を行うとともに、フランスにおける現象学の受容と発展の過程について濃密な議論を重ねることができた。また、期間中に外部有識者を招いたレクチャーを4回、研究分担者による成果報告会を4回開催し、さまざまな観点から研究課題に関する知見を共有・検討することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

フランスにおける現象学受容は、これまでフッサールやハイデガーといったドイツの代表的哲学者との比較という観点から論じられることが多かったが、本研究はエピステモロジー、人間科学、文学といったフランス固有の知的文脈を踏まえてフランスにおける現象学の受容と発展の過程を再検討することで、フランス現象学の独自性を明らかにすることができた。また、フランス現象学の独自性として本研究が提示した「いわく言いがたいもの」というテーマは、言語化しがたいものを言語化することはいかにして可能か、そしてそのような作業を実践することの意義は何かといった一般的な問題に通じるものであり、その点でアクチュアルな意義を有している。

研究成果の概要（英文）：During the period of this study, reading sessions on literature on French phenomenology were held every two weeks to share academic findings among the research members. They enabled intensive discussions on the process of acceptance and development of phenomenology in France.

In addition, four lectures by outside experts and four meetings to report on the research by the research members were held. They enabled us to discuss findings on research issues from various perspectives.

研究分野：現象学、フランス近現代思想

キーワード：現象学 実存主義 脱構築 フッサール メルロ=ポンティ レヴィナス デリダ

1. 研究開始当初の背景

現象学の受容が20世紀のフランス哲学にとって決定的な契機であることに異論の余地はないだろう。その背景として、当時フランス哲学界の重鎮であったL. ブランシュヴィックに代表される、客観的・科学的思考を重視する主知主義的哲学への反発が指摘されてきた。当時フランスでは、J. ヴァールの『具体的なものへ』(1932)が象徴するように、ベルクソンの哲学を一つの震源として、科学的思考には捉えがたい直接経験の復権を目指す立場が台頭しつつあり、この流れに倣差す形でフッサール現象学も受容されたというのである。

ブランシュヴィック対ベルクソンという対立図式は、エピステモロジー対実存主義という20世紀フランス哲学全体を貫く対立図式の発端であり、サルトルやメルロ＝ポンティのようにフランスで最初に現象学的哲学を展開した哲学者たちはみな後者の陣営に帰属されてきた。しかし、この見方は不正確である。たとえばメルロ＝ポンティは、各所でブランシュヴィックを批判する一方で、心理学などの科学の発展そのものに哲学的意義を認める彼の姿勢には、科学の歴史的進歩を意識の発展とみなすブランシュヴィックの影響が顕著である。メルロ＝ポンティはさらに、直観によって直接経験に到達するベルクソンの方法論を批判し、主知主義的な反省とは異なる新しい反省の方法を模索していた。これらの論点は、メルロ＝ポンティを単純にベルクソンや実存主義の陣営に含めることで見失われてしまう。同様の事柄は後続の哲学者についても言える。たとえばデリダはサルトルやメルロ＝ポンティとは別に、カヴァイエスなどのエピステモロジストにも目を配り、事実と理念の結びつきを強調した。こうした点も、現象学を単純にベルクソンや実存主義と結びつける視座では見落とされる。

また、従来のフランス現象学研究では、文学や人間科学といった哲学外の諸潮流の影響もしばしば見過ごされる。周知のように、フランスの現象学者たちにとって、文学は重要な主題の一つであった。また、初期のサルトルとメルロ＝ポンティは、精神病理学やゲシュタルト心理学など人間科学の成果を詳細に検討することで自身の哲学を練り上げた。狭義の哲学のうちで自足せず、「非哲学」の中に哲学的問題を見出そうとするこの姿勢は、フランス現象学の重要な特徴であるが、フッサールやハイデガーの影響という観点から検討する従来の研究の中では、精々副次的に取り上げられるにすぎない。

フランスにおける現象学受容に関する従来の研究は、このようなフランス固有の複雑な知的状況の検討を怠っているがゆえに、フランス現象学の代表的論者をフッサールやハイデガーと直接比較し、フランス独特の現象学理解を指摘することはできても、その理解の偏りがそもそもなぜ生じたのかという根本的な疑問に答えることができない。ここから本研究の核心をなす問いが生まれる。それは、フランス現象学の初期の担い手たちはそもそもどのような関心に基づいて現象学を受容し、展開したのかという問いである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、20世紀前半のフランスの知的状況を、直接経験の哲学、エピステモロジー、文学、人間科学といった多様な分野にまたがって調査し、その成果に基づいてフランス現象学の初期の担い手たちの思想を再解釈することで、上記の問いに答えることである。

このように広範な分野と多様な哲学者の諸研究を一つにまとめるキーワードとして、本研究はJ. イポリットが『論理と実存』で用いた「いわく言いがたいもの(1' ineffable)」という言葉に着目する。この用語は「意識の直接所与」(ベルクソン)、「具体的なもの」(ヴァール)、「生きられた世界」(メルロ＝ポンティ)などの言葉と同様に直接経験を指示するための用語であるが、本研究があえて「いわく言いがたいもの」という耳慣れない用語を採用する理由は、直接経験の探求の企てと、言語表現の問題とのつながりを明示するためである。ベルクソンやヴァールは、直接経験をあらゆる言語化を拒絶する「語りえぬもの」とみなす傾向があった。それに対して、本研究では「いわく言いがたいもの」を、言語化困難でありながらも言語化の可能性に開かれた経験を指示するために用いる。フランス固有の知的状況を踏まえることで見えてくるフランス現象学の根本的関心とは、言語化・概念化しがたいものをそれでも哲学的に探求することがいかにして可能かという問いだというのが本研究全体を導く仮説であり、この仮説に従って、従来見過ごされてきたフランス現象学の歴史的背景を明らかにするのみならず、「いわく言いがたいもの」をめぐる問題構成のもとでフランス現象学全体を捉え直すことが、本研究の目指すところである。

3. 研究の方法

フランス現象学の背景をなす20世紀前半のフランスの知的状況の調査と、「いわく言いがたいもの」をめぐる問題系との関わりから見たフランス現象学の担い手たちの思想の再解釈という作業に、メンバー各自がそれぞれの専門的知見を活かして取り組んだ。

研究にあたっては、隔週でフランス現象学の受容史に関連する基礎的文献を取り上げる読書会を継続的に開催し、メンバー間で問題意識と学術的知見の共有に努めた。また、メンバー内でカバーしきれないトピックに関しては、外部から専門家を招いてレクチャーやディスカッションを行い、フランス現象学生成の背景にあった多様な知的文脈を可能な限り網羅的に把握する

よう努めた。

4. 研究成果

メルロ=ポンティを専門とする佐野泰之は、文学および人間科学との関わりの中でメルロ=ポンティが「いわく言いがたいもの」の問題にどのように取り組んでいたかを検討した。文学に関しては、サルトルのプリス・パラン論「行きと帰り」についての読書ノートを手がかりに、パラン、サルトル、メルロ=ポンティの三者における「沈黙」という主題に対する態度の相違を明らかにした。人間科学に関しては、オランダの哲学者ヘンドリック・ポスの言語理論がメルロ=ポンティに与えた影響に注目し、彼における言語学と言語の現象学の関係を明らかにした。

同じくメルロ=ポンティ研究者の川崎唯史は、『知覚の現象学』に結実するメルロ=ポンティの初期の哲学のプログラムを知覚の本性の解明から主体の本性の解明として見定めたとうえで、その倫理的含意を体系的に明らかにした。また、『具体的なものへ』や『人間の実存と超越』におけるジャン・ヴァールのフッサール理解と『知覚の現象学』のそれを比較し、メルロ=ポンティが具体的なものに単に接近するだけでなく、それを言語化などの作業を通して高次の認識へともたすことを重視していたことを明らかにした。

レヴィナス研究者の樋口雄哉は、レヴィナスの「現実とその影」をジョルジュ・バタイユの「実存主義から経済の優位へ」への応答とみなしながら、レヴィナス、バタイユ、そして両者の議論と密接な関係をもつジャン・ヴァールの三者が、哲学と詩の関係についてどのような見解をもっていたかを比較考察した。

デリダ研究者の松田智裕は、ジェラルド・グラネルに注目し、彼の時間論や知覚論を同時代の諸潮流との関係から読み解くことによって、ラニヨー、アラン、アレクサンドルといったフランスにおける「フランスの知覚学派」の議論と現象学がグラネルという哲学者のうちで果たした特異な邂逅を描き出した。

同じくデリダ研究者の小川歩人は、アルフォンス・ド・ヴァーレンスが提示した「現象学から実存主義へ」というスローガンを導きとしながら、1940年代から50年代にかけてのフランスにおける現象学受容の諸様相を大局的に描き出した。また、そこに見られる超越論主義と実存主義の対立を、50年代のデリダが「起源的なもの」と「始原的なもの」の弁証法という観点から乗り越えようと試みていたことを明らかにした。

フッサール研究者の鈴木崇志は、フランスにおける初期の現象学受容において重要な役割を果たしたジョルジュ・ギュルヴィッチのフッサール解釈を検討し、そこにおける独特の現象学理解を明らかにした。また、ベルンハルト・ヴァルデンフェルスによるレヴィナス受容を読み解くことで、フランスにおいて形成された独自の現象学が、次世代のドイツに再輸入された事例を検討した。

以上の研究成果は、本研究のプロジェクトの一環として開催された成果報告会やその他の研究会で発表され、論文化の準備が進められている。また、メンバー及び外部協力者による本研究の成果をまとめた論集の出版が計画されている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 小川歩人	4. 巻 47(7)
2. 論文標題 ポストモダンという毒 / 薬あるいはサプリメントの略歴 今日、ジャック・デリダを支点として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 185-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小川歩人	4. 巻 128
2. 論文標題 閉域に滞留し、歴史を展開するー松田智弘『弁証法、戦争、解読』に寄せてー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 3-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口雄哉	4. 巻 3
2. 論文標題 経験と形而上学 ヴァールとレヴィナス	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 レヴィナス研究	6. 最初と最後の頁 32-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木崇志	4. 巻 49(13)
2. 論文標題 現れる他者との向き合い方：現象学の立場から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 226-236
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口雄哉	4. 巻 44
2. 論文標題 愛なきセックスの世界 金塚貞文のオナニー論をてがかりに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同志社哲学年報	6. 最初と最後の頁 41-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口雄哉	4. 巻 71
2. 論文標題 ヴァールにおける瞬間と時間	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文化学年報	6. 最初と最後の頁 257-281
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田智裕	4. 巻 128
2. 論文標題 応答と課題 デリダをさらに「解読」するために	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 53-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川崎唯史	4. 巻 36
2. 論文標題 文学作品を用いた現象学的倫理学の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 3-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川崎唯史	4. 巻 24
2. 論文標題 メルロ=ポンティの倫理学とボ=ヴォワール	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 メルロ=ポンティ研究	6. 最初と最後の頁 55-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yasuyuki SANO	4. 巻 54
2. 論文標題 La double metamorphose du corps chez l'ecrivain, selon le cours de Merleau-Ponty au College de France, 1953.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 仏語仏文学研究	6. 最初と最後の頁 161-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/00080167	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐野泰之	4. 巻 36
2. 論文標題 メルロ=ポンティと「生き方としての現象学」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 95-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田智裕	4. 巻 36
2. 論文標題 時間の弁証法=フッサール『時間講義』をめぐるピカルとデリダー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現象学年報	6. 最初と最後の頁 121-128
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口 雄哉	4. 巻 12
2. 論文標題 アンリとヴァール、近さと隔たり	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ミシェル・アンリ研究	6. 最初と最後の頁 41～51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20678/henrykenkyu.12.0_41	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 川崎唯史
2. 発表標題 レヴィナスと医療
3. 学会等名 レヴィナス協会第4回大会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐野泰之
2. 発表標題 意識の沈黙と言語のざわめき サルトル「行きと帰り」を読むメルロ=ポンティ
3. 学会等名 フランス現象学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木崇志
2. 発表標題 フッサールにおける共同精神と歴史的世界
3. 学会等名 第2回東アジア間文化現象学会議 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 樋口雄哉
2. 発表標題 アンリとヴァール：隔たりと隔たりのなさ
3. 学会等名 日本ミシェル・アンリ哲学会第13回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松田智裕
2. 発表標題 独白と伝達 鈴木崇志『フッサールの他者論から倫理学へ』に寄せて
3. 学会等名 フランス現象学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 松田智裕
2. 発表標題 時間と知覚 G. グラネルのフッサール論
3. 学会等名 フランス現象学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川歩人
2. 発表標題 弁証法、エクリチュール、目的論 「前期デリダ」というエポック = 閉域について 松田智裕『弁証法、戦争、解読 前期デリダ思想の展開史』へのコメント
3. 学会等名 『弁証法、戦争、解読 前期デリダ思想の展開史』合評会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小川歩人
2. 発表標題 初期デリダにおける「素朴さ」の主題 オイゲン・フィンクによるフッサール解釈との比較から
3. 学会等名 日本現象学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小川歩人
2. 発表標題 「いわく言いがたいもの」をめぐる超越論主義と実存主義のパサージュ 一九五〇年代のデリダの現象学研究を支点として
3. 学会等名 フランス現象学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川崎唯史
2. 発表標題 メルロ=ポンティ倫理学の変容：知覚から表現へ
3. 学会等名 フランス現象学研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 樋口雄哉
2. 発表標題 愛なきセックスの新世界
3. 学会等名 Societas Philosophiae Doshisha
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 樋口雄哉
2. 発表標題 経験と形而上学—ヴァールとレヴィナス
3. 学会等名 レヴィナス協会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐野泰之
2. 発表標題 言語という「いわく言いがたいもの」 ポス、ソシュール、メルロ=ポンティ
3. 学会等名 フランス現象学研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 樋口雄哉
2. 発表標題 ヴァールとバタイユのあいだのレヴィナス(2)
3. 学会等名 フランス現象学研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川崎唯史
2. 発表標題 メルロ=ポンティから現象学的倫理学へ
3. 学会等名 関西倫理学会2022年度大会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川崎唯史
2. 発表標題 振舞いとしての『知覚の現象学』序文
3. 学会等名 フランス現象学研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小川歩人
2. 発表標題 去勢のシミュラクルあるいは一般化されたフェティシズム デリダのヘーゲル哲学と精神分析への関心について
3. 学会等名 第33回日本ヘーゲル学会シンポジウム「ヘーゲルと精神分析」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川歩人
2. 発表標題 1940年代末フランスにおける現象学受容の一側面 アルフォンス・ド・ヴァーレンス「現象学から実存主義へ」を中心に
3. 学会等名 フランス現象学研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小川歩人
2. 発表標題 見者の行為とアイロニー
3. 学会等名 檜垣立哉教授大阪大学最終年度シンポジウム
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小川歩人
2. 発表標題 『グラマトロジーについて』におけるイェルムスレウ言語論評価についての一考察 グラフィックな地層と原エクリチュール
3. 学会等名 シンポジウム「イェルムスレウとフランス現代思想」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 小川歩人
2. 発表標題 初期デリダにおける暴力の主題 植民地主義とアルジェリア戦争を背景として
3. 学会等名 シンポジウム「いま、国家の脱構築？ デリダ、レヴィナス、中上健次と「国民国家（ネーション・ステート）」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 鈴木崇志
2. 発表標題 価値と他者はどうに経験されるか：現象学的アプローチ
3. 学会等名 関西倫理学会2022年度大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木崇志
2. 発表標題 フランスの現象学受容におけるジョルジュ・ギュルヴィッチの役割：『ドイツ哲学の現在の諸傾向』（1930）を中心に
3. 学会等名 フランス現象学研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 松田智裕
2. 発表標題 グラネルにおける現象学と「フランスの知覚学派」
3. 学会等名 フランス現象学研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 川崎 唯史	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 348
3. 書名 メルロ=ポンティの倫理学	

1. 著者名 杉村 靖彦、渡名喜 庸哲、長坂 真澄編（樋口 雄哉）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 422
3. 書名 個と普遍	

1. 著者名 鈴木崇志	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 352
3. 書名 フッサールの他者論から倫理学へ	

1. 著者名 レヴィナス協会、渡名喜 庸哲、藤岡 俊博、石井 雅巳、犬飼 智仁、小手川 正二郎、佐藤 香織、長坂 真澄、服部 敬弘、馬場 智一、平石 晃樹、平岡 紘、村上 暁子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 352
3. 書名 レヴィナス読本	

1. 著者名 ジャック・デリダ、吉松 寛、亀井 大輔、小川 歩人、松田 智裕、佐藤 朋子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 400
3. 書名 生死	

1. 著者名 加國 尚志、亀井 大輔	4. 発行年 2023年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 342
3. 書名 視覚と間文化性	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松田 智裕 (Matsuda Tomohiro) (00844177)	立命館大学・衣笠総合研究機構・研究員 (34315)	
研究分担者	鈴木 崇志 (Suzuki Takashi) (30847819)	立命館大学・文学部・准教授 (34315)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	樋口 雄哉 (Higuchi Yuuya) (40823034)	同志社大学・研究開発推進機構・嘱託研究員 (34310)	
研究分担者	川崎 唯史 (Kawasaki Tadashi) (90814731)	東北大学・大学院・特任講師 (11301)	
研究分担者	小川 歩人 (Ogawa Ayuto) (90850462)	大阪大学・大学院人間科学研究科・招へい研究員 (14401)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	松葉 類 (Matsuba Rui)		
研究協力者	赤阪 辰太郎 (Akasaka Shintaro)		
研究協力者	石井 雅巳 (Ishii Masami)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関